

阿川弘之

米内光政

上卷

阿川弘之
米内光政
上卷

新潮社



米内光政 よないみつまさ 上巻

昭和五十三年十二月十五日印刷
昭和五十三年十二月二十日発行

著者 阿川弘之 (あがわひろゆき)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務(二六六)五一一一 振替東京四一八〇八
編集(二六六)五四一一

印刷所 株式会社金羊社

製本所 新宿加藤製本

定価九五〇円

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1978.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

米内光政

上卷

序 章

一

敗戦後三十年目の昭和五十年暮、井上成美という一人の提督が亡くなった。つづいて翌五十一年の一月百武源吾が亡くなり、六月嶋田繁太郎が他界し、これで、日本に残っていた第二次世界大戦時の海軍大將はすべて此の世から姿を消した。百武が九十四歳、嶋田は九十二歳、井上が八十六歳であった。

旧海軍最後の三大將のうち、井上成美と嶋田繁太郎とは、その志操風格閱歷においてずいぶん対照的だった軍人である。昭和十六年の十二月、東條内閣の海相、海軍側の最高責任者として対米英開戦ゴアの承認を与えた嶋田に対し、井上は此のいくさに徹頭徹尾反対し抜いた。そのため、戦中は第四艦隊の司令長官、江田島の海軍兵学校長と、中央から遠ざけられていたが、戦争末期海軍次官に起用されると、大臣の米内光政を援けて、極秘裡に、しかし強硬に早期終戦を主張した。

「敗戦と亡国とはちがう。古来いくさに勝って国が衰亡した例は少くない。逆に戦いに敗れて興

隆した国がたくさんある。無謀の戦争に此の上本土決戦の如き無謀をかさねるなら、日本はほんとうの亡国になってしまふ」

それが米内と井上に共通の信念であつたけれど、井上次官の催促よりは、米内に対してすら、「大臣手ぬるい。一日も早く」

と、時に激越な調子だったという。

いわゆる「戦争責任」からもっとも遠い人と思われていたが、戦争終結後、「責任を感じる」と言つて横須賀長井の寒村へ引つこんでしまい、亡くなるまで二度と世に出なかった。村の子供たちにギターを弾いて聞かせ英語を教え、僅かな生計の資を得て暮した。

「英語塾をやられるならやられるで、もう少し世間並みの月謝を貰われては」と人がすすめても、

「ここは半農半漁の村で、みんな貧しいのだから」

と、多くを受け取ろうとしなかった。

陛下より見舞いの侍従がこの村へ差遣されたことがあるが、井上大将の茅屋に、天皇の使を迎えるにふさわしい用意は何も無かった。早く夫人を喪い、ひとり娘靚子しやうこの夫は戦死し、靚子は肺を病んで隣室で寝ていた。朝五時に起きて井上が自分で朝飯の支度をする。ついでに昼の弁当をつめておいて村童の英語のレッスンにかかる日常で、見かねた侍従は黙って一旦辞去し、海べの店で昼をすませてからもう一度訪ねて来たという逸話が残っている。

ジャーナリズム関係には固く門を閉ざしていたが、旧知の旧黒潮会（海軍省記者クラブ）記者が訪れた時、

「来てくれて俺のところには何も御馳走するものが無い」

と、井上が三浦半島の磯に出て流木を拾って来、風呂をたててもてなして、記者に「鉢の木」の故事を思い出させたという話もある。

昭和二十三年に靚子が死んだ。天涯孤独になった老提督の身边は索莫としたものだったようで、かつての部下の柚木誠之中佐が、

「こうして暮しておられると、一日中誰とも話をされなないことがあるのではありませんか」と聞くと、

「そうなんだよ。それが淋しいな」

と答えた。

娘の死から五年後、井上自身も大病（胃潰瘍）を患い、横須賀市立病院で生き死にの大手術を受けた。やはり昔の部下で、

「世間から忘れ去られるのが井上さんの本意かも知れないが、あの窮迫ぶりは見るに忍びない。世の中も少し落ちついて来たことだし、元軍需会社関係の顧問とか、そういうかたちで、食べて行かれるくらいの道は何とでもつくはずだ。健康保険がもらえるだけでも助けになるんじゃないか」

と、再起を促しに行った人があったが、申出を峻拒され、

「何を言ってみたって、井上さんが一切受けつけてくれないんだからどうにもならんよ」

と言って帰って来た。

井上はこの謹慎隠遁の生活を、三十年間持しつづけた。昭和二十九年の春、緒方竹虎らの肝いりで米内光政の七年を偲ぶ集りが催された折にも、大病の後ではあったが、一言の理由もつけ加えず「欠席」の返事を出している。

手術の際、親身に彼の身のまわりの面倒を見たのは、兵学校長時代の教え子たちであった。この病氣療養が縁になって井上は安井富士湖という女性と再婚した。かたちだけの老夫婦だったと言われているが、そのあと教え子のクラス会に出席を懇望され、世話になった礼を述べるつもりで東京へ出て来たのが、隠棲後亡くなるまでの三十年間に、井上が公けの場所に姿を見せたただ一度の例外になった。

後添いの富士湖夫人に見守られて、八十六年の生涯を閉じた時、井上大将の死の床に、英語の聖書と日本語の聖書と「讚美歌」が残っていた。聖書にはいっぱい符箋がついていてあちこち赤線が引いてあった。愛というものを説いた箇所、赤い線がたくさん見られた。

伊藤正徳著「連合艦隊の最後」も残っていた。「序」の第三節、「戦争を決めた少数の犯人は万死に値する」というところに、強く傍線が引いてあった。

「戦争を決めた少数の犯人は万死に値するが、戦った幾百万人の犠牲心は、時代が何う変わろうとも、不滅の尊い記録として永久に民族史の上に染められるべきである。連合艦隊とその人々。連合艦隊は再び還らないが、日本と日本人とは残った。問題は、その日本人が『還らぬ人々』の愛国心と犠牲心とを記憶して、よく己れの戒めとするか何うかに懸かる」と。

米内や井上が極力避けようとして叶わなかった米英とのいくさは、世界第三位の聯合艦隊を全滅させ、海軍省の官制は廃止になり、すべての伝統行事も無くなってしまったが、その中で海軍恒例の遠洋航海が、昭和三十三年、海上自衛隊の練習艦「はるかぜ」「すぎ」「かや」「くす」四隻のハワイ訪問を以て再開された。昭和十五年、戦前最後の旅順、大連、上海行き以来十八年ぶ

りであった。

その後、年々北米へ、濠洲、ヨーロッパ方面へと出かけて、昭和四十三年六月、南米向け遠航の際、嶋田繁太郎大将が練習艦隊出港の壮行会に招待をうけた。

嶋田は戦犯として果嶋に抑留中も、釈放されてのちも、対世間的に一切の弁明をせず、回顧録のようなものにも筆を染めず、その意味では井上成美と同じく晩節をけがさなかった人であるけれども、この時すでに八十四歳の高齢で、来賓のうち旧海軍の最長老だからと、求められるまま壮途を祝う乾杯の音頭を取った。そのことが井上の耳に入った。

練習艦隊司令官大川秀四郎海将補（海軍兵学校六十四期）の下に旧兵学校出身者が大勢おり、井上が校長時代七十四期前後の教え子も乗っていた。その一人が、帰国後南米土産をたずさえて長井の村に井上を訪ね、報告かたがた壮行会の時の模様を話したのである。これを聞くと、

「なに。嶋田大将が練習艦隊の壮行会に出て、乾杯の音頭を取った？」井上は色を成し、「恥知らずにも程がある。人さまの前へ顔が出せる立場だと思っているのか」

と、文字通り唾棄せんばかりの勢いで、つばきが飛び、報告に來た自衛官をびっくりさせた。

三

帝国海軍は其の七十余年の歴史の間に、死後の昇進者をふくめて七十七人の大将を輩出した。井上が戦後、自分を除くこれら七十六提督を評価して、

「日本の海軍には、一等大将と二等大将とがあった」

と言ったのは、有名な話になっている。

「一等大将と二等大将、三等大将の別がありました」

と聞いている者もある。

もともと彼自身の大將進級に部内で強い異論があり、戦争中一部から「親英米の国賊」呼ばわりをされていた人で、

「そんなら井上は何等大將なんだ。井上もあんなことは言わん方がいい」

と、此の発言に対しては老クラスメイトの中からさえ強い非難が出たし、

「井上さんは考えが余りに偏狭すぎる」

という批判もあった。それで、

「一体、一等大將とか二等大將とか、何を以て区別されるのですか」

訊ねる人があると、井上は、

「將としての識見の有無です。昔の大將にはそれ相応の識見を持った者が任ぜられた。それが近年、人格で大將になる者が出て来た」

と答えた。大角岑生や及川古志郎や嶋田繁太郎の顔が、彼の脳裡に泛んでいたのであろう。

いわゆる条約派の將官たちが大勢追放された時代（昭和九、十年）、海軍大臣の椅子に坐っていた大角大將にしろ、日独伊三国同盟締結の海軍側責任者及川大將や、開戦時の海相嶋田大將にしろ、押し出しは立派だし人あたりはいいし、決して猪武者の大砲屋といったものではない。平穩な世に平穩なつき合いをしている分には、教養豊かで魅力に富んだ海の武將であったにちがいない。及川古志郎大將など、支那学の素養にかけても其の道の学者なみと言われていた。

しかし、国の安危がかかって来るクリティカルな場面に、はつきりした見通しが持てず、横から下からの突き上げにあうとすぐ腰くだけになってしまふような和協田満の八方美人、支那学の素養だけの人格大將がいてくれば困るというのが井上の言い分であった。

日本の近代史に多少とも興味のある人なら、聖将名將として誰しもその名を承知している東郷平八郎元帥すら、井上の基準では一等大將に入っていないかった。

東郷は、明治三十八年の五月、世界の海戦史上稀有のパーフェクト・ゲームと評される日本海海戦（対馬沖海戦）を指揮した聯合艦隊司令長官であって、日露戦争が日本の勝利に終り、艦隊の戦時編制を解く時、東郷が麾下に布告した「聯合艦隊解散の辞」の結句、「古人曰く勝つて兜の緒を締めよ」は、時のアメリカ大統領セオドール・ルーズベルトに深い感銘を与えた。ルーズベルトは特例の大統領命令を以て、これを全アメリカ陸海軍に示し、英国王にまで書簡に写しを入れて送っている。ただし、「解散の辞」の中に、「百発百中の一砲能く百発一中の敵砲百門に對抗し得るを覚らば」という言葉が見える。

これが後年、日本海軍の精神主義、「月月火水木金金」の猛訓練一途につながって行くわけで、井上は昭和五年大佐で海軍大学の教官当時、学生に「百発百中の砲一門は能く百発一中の砲百門に對抗し得るか」という命題については是非を論じさせたことがあった。自分では内心、

「あんな馬鹿なことがあるものか。あの時から、海軍の堅持すべき合理主義がゆがめられ始めたのだ」

と思っていた。

四

東郷平八郎は、晩年部内で神様扱いをされるようになった。重大案件は何事も、八十を過ぎた老元帥の意向を聞いてからという奇妙な風潮が出来上り、ロンドン軍縮条約の批准にあたって、加藤寛治や末次信正、小笠原長生らの取巻きにかつがれた東郷は、少壮強硬派の勇ましい連中と

同じことしか言わなくなり、最高人事に口を出して海軍の進路を誤らせるもを作った。そのことも、井上には甚だ気に入らなかつたようである。

大体、広瀬武夫を軍神に仕立て、東郷を聖将にして神社を建てたりしたのは、陸軍の肉弾三勇士などと同じく、軍の宣伝目的からであつて、横須賀の古い海軍料亭「小松」の先代女将は、

「あんたたち、東郷さんとか広瀬さんとか、特別の人のようにむやみと奉り上げるけど、うちへ来て芸者をあげてお酒を召し上る時は、みんな同じだったよ」

と、よく言っていた。

井上にしてみれば、「小松」のおかみの言うことの方が、部内の東郷崇拜よりずっと胸におさまりやすかつたであろう。

私は、井上成美提督について、この種の話を含めこれまで度々書いている。東郷平八郎と名ざしではなかつたが、

「如何に偉功を樹てた軍人といえども、これを神格化するなどは、以ての外のことです」という言葉は、井上の口からじかに耳にした。

昭和十七年の秋、海軍兵学校長に補せられて江田島に着任後間もなく、井上が、参考館に掲げてあつた歴代海軍大将の写真を全部下ろさせた話も書いた。

「大戦争の最中、いやしくも生徒が未来の大臣大将を夢みる出世主義に取りつかれてはならぬから」

それが表向きの理由であつたが、心を許した下僚には、

「あの中に半数、私が国賊と呼びたい人間がいる。そういう者の肖像を生徒に景仰させるわけにはいかない」

と洩らしたという、「国賊」が国賊を罵った話である。

繰返しが多くなるのは不都合だし、今は井上成美の生涯を紹介するのが目的ではないけれども、戦後人に、

「井上さんは結局、リベラリストとして一生を貫かれたということになりますか」

と聞かれて、

「いいえ。その上にラディカルという字がつきます」

と答えた井上、自分にもきびしかった代り、先輩同僚に対しても偏狭なくらい点の辛かった彼が、米内光政をどう見ていたか、そこから此の物語を始めようと思う。

五

歴代海軍大将のうち、誰と誰とが国賊で、誰が一等か三等か、井上は自分から言おうとはしなかった。

海軍には、古く有栖川宮威仁親王、東伏見宮依仁親王、近年伏見宮博恭王と、皇族出身の大将が三人いたから、あからさまに言う旧皇族にまで疵をつけることになる。しかし、昔の教え子たちが、

「山本権兵衛さんは一等大将ですか」

「加藤友三郎さんも一等ですね」

という風に名前を挙げて訊ねれば、イエスカノーかだけは答えた。

「それでは、昭和期の大将で山本五十六元帥」

当然一等大将でしようという口調で質問すると、

「ちょっと待て」と、井上が遮ったそうである。「無条件じゃないぞ、山本さん」

山本五十六と井上とは、志も全く同じ、日独伊三国同盟問題で国内がもめにもめていた昭和十三、四年頃、共に命を張って事にあたった親しい先輩後輩の仲であったけれども、山本が聯合艦隊司令長官転出後、近衛首相に呼ばれて海軍の対米英戦に対する見通しを聞かれ、

「それは、是非ともやれと言われるなら、最初の一年や一年半は思う存分暴れて御覧に入れます」

と答えた一言を、井上は容認しなかった。

「山本さんは、何故あの時あんなことを言ったのか。軍事に素人で優柔不断の近衛公があれを聞けば、とにかく一年半は持つらしいと曖昧な気持になるのは決り切っていた。海軍は対米戦争やれません、やれば必ず負けます、それで聯合艦隊司令長官の資格が無いと言われるなら私は辞めますと、何故はつきり言い切らなかったか」

東郷平八郎と山本五十六が落第するくらいだから、色々名前を出してみても、なかなか首をたてに振らない。一等大将とか二等大将とか、無論一つの比喩的表現に過ぎないけれど、もともと井上は、世間一般とちがい、大将の地位をそれほど大したものとは考えていなかった。

戦後、生きている間公表しない約束でテープに吹きこんだ井上の談話が残っていて、その中に、「兵学校の校長のときにわたしは大將の位がえらいなんてちっとも思いませんでした。思わせようたって無理です。それでちょうどいいんです」

という一節がある。

したがって「大將の位がえらいなんて」思っているような大將は全員落第なのだが、この容赦なしの井上成美が、同時代の提督のうち無条件で一等大將と認めていたのが米内光政であった。

井上の教え子、海軍兵学校七十四期生の某氏は、

「真の識見を持った大将となると、結局井上さんは明治期で山本権兵衛、大正の加藤友三郎、昭和の初めから戦争中にかけては米内光政、この三人しか認めていなかったと思います。山本五十六さんほか数人が二等大将か辛うじての一等大将、あとは東郷元帥をふくめて全部三等大将だったのではないでしょうか」

と語っている。

六

井上の残したテープの中には、次のような発言もある。

「アメリカ、イギリスとの軍備の比率は低い方がいい、戦をすれば負けるから、なんとか外交でしのいでいかにかん、とわたしは思っていました。が、軍人としてそれを自分に言いよかせるといふことは悲しいです。そしてくやしいですよ。くやしいけれどもね、そういう国なんだから自分よりも技術が進み、富もあり、人口もたくさんある、土地も広いという国があるということ、仕方がない。もがいたって、これを脱けるわけにいかない。その中で、無理をしない範囲で立派な国になっていく方がいいんじゃないか。そういう風に考えた。(中略) どんどんどんどん軍艦が出来て海軍が強くなるのはいい気持ちですけども、そうはいかないんだからしょうがないと思っていました」

「戦はしない方がいい、しかし、月月火水木金で猛訓練をしている。そのジレンマは大変なものだったろうと人はいうけれども、わたしはそれとはちがいました。国の存立のためには立つ。国滅びるといふのなら、国が独立を脅かされるときには、とにかく立つ。そのためには軍備とい

うものが必要だ。国の生存を脅かされ、独立を脅かされた場合には立つ。そのかわりに、味方をつくっておかなけりゃいけない。自分じゃ勝てない。正々堂々の主張をするならば味方ができる、とわたしは考えています。弱い国家を侵略してそれを征服して自分のものにしようということをする者は、必ずほかの国の批判にあつて、みそかの晩の金勘定の清算をさせられる時期が来る、と思う。軍備というものは要らないじゃないか、戦しないのなら——そういう意味じゃないですね」

だが、これが井上成美の言う「識見」のヒントだとすれば、必しも米内や井上独自の考え方ではない。旧海軍の上層部に比較的広く存在した思想であつた。ただ、どんな場合にも勇氣と明察とを以てその「識見」を堅持し得たか、時流に眩惑されて眼鏡をくもらせたり、自身の名利にとられて首鼠兩端の態度をとったりしなかつたかということになると、話が別になつて来る。

米内光政は、それが出来た、或は絶対にそれをしなかつた軍人で、井上が無条件に一等大將と認める所以もそこにあるのだらう。それではしかし、若い時から米内は識見衆にすぐれ、将来提督中の提督になるべき人材として人に囑目されていたかという点、どうもそうでなかつた。

第一、兵学校の卒業成績がよくない。江田島二十九期の同期生百二十五人中、米内の席順は六十八番で、これは「ハンモック・ナンバー」と称して海軍兵科將校の履歴に一生ついて廻る。一等大將にせよ三等大將にせよ、ハンモック・ナンバー中以下の者が大將まで昇進するということは、普通考えられなかつた。

小泉信三が、

「米内光政は国に事がなければ、或いは全く世人の目につかないままで終る人であつたかも知れない」